

《増補版》

# しれとこ の森通信

2008  
No.11

100平方メートル運動の森・トラスト

## 第二次回帰作業結果報告

平成15年(2003)～19年(2007)の森づくり

ぼうろくさく

防鹿柵のなかで芽吹くオヒョウの若葉。

エゾシカが特に好むオヒョウは、100平方メートル運動地から急速にその姿を消しつつあります。次世代を担うはずの若い苗はすべてシカに食べられ、樹皮剥ぎによる母樹の枯死も相次いでいます。

「100年後にもオヒョウの大木がある森を…」

この小さなオヒョウが、次世代に生命の環をつなげてくれることを願うばかりです。

この用紙は環境保全（資源活用）のため再生紙を使用しています。



**NATIONAL TRUST**

知床で夢を育てませんか！

いのちあふれる森を次の世代へ



## 100平方メートル運動の森・トラスト

知床に原生の森を再生させる取り組みを始めて30年以上が経ちました。運動地を5つの区画に分け、5年間で運動地全体を一巡する森づくり作業は今年から3巡目に入ります。

この間に、知床は世界自然遺産に登録され、運動地も遺産登録地に含まれることになりました。人の手によって改変された場所が自然遺産として登録されることは極めて稀ですが、これは運動の取り組みが市民参加による自然復元のモデルとして高い評価を受けたからです。今後は、その成果が世界から注目されることになります。

森づくりは、一朝一夕になせるものではなく、100年、200年先をめざす地道な取り組みです。世代を超えた夢の実現のために、私たちは、確かな歩みを刻んでまいります。

引き続き運動へのご協力をお願い申し上げます。

斜里町長 村田 均



# しれとこ100平方メートル運動の展開

- |              |   |
|--------------|---|
| 昭和52年(1977)  | 「しれとこ 100 平方メートル運動」の提唱・開始                               |
| 平成 9 年(1997) | 20年目で募金目標に到達<br>新たな展開「100 平方メートル運動の森・トラスト」のスタート         |
| 平成10年(1998)  | 森の生態系を再生する作業を本格的に開始                                     |
| 平成14年(2002)  | 運動地を一巡した第一次回帰作業が完了                                      |
| 平成15年(2003)  | 第二次回帰作業の開始  |
| 平成17年(2005)  | 知床が世界自然遺産に登録  |
| 平成19年(2007)  | 「しれとこ 100 平方メートル運動」の提唱・開始から30年が経過<br>運動地を一巡した第二次回帰作業が完了 |
| 平成20年(2008)  | 夢の森へ向けて、第三次回帰作業の開始                                      |

## 知床で夢を 育てませんか!

平成 9 年～

### 「100平方メートル運動の森・トラスト」への展開

- \* 保全の強化→「譲渡不能の原則」制定
- \* 担い手を配置→「森の番人」
- \* 人工植林地を自然の森へ誘導する  
→5年で全体を一巡する作業
- \* 生き物たちの営みも復元
- \* 森を通じた交流

### 「原生の森へと育てる」

## 知床で夢を 買いませんか!

昭和52年～

### 「国立公園内しれとこ 100平方メートル運動」の開始

- \* 開拓跡地を乱開発から守れ!
- \* 全国4万9千人の夢
- ↓
- 470ヘクタールあまりの土地の買い取り
- \* 約42万本もの苗木を植えてきた

### 「土地を守る」

### 新たな ステージへ

運動 取得地	+	既存 町有地
約460ha		約390ha
「譲渡不能の原則」で永久に保全 条例を定める		

知床連山の山麓に広がる約850ヘクタールの運動地。  
ここは5つの区画に分けられ、1年に1区画ずつ5年でひと回り  
する回帰作業方式で森づくりが行われています。平成19年(2007)、  
2度目の回帰作業が完了しました。今回の「しれとこの森通信」は、5年に1回の  
森づくりの報告を兼ねて、昭和52年(1977)からの全ての100平方メートル運動  
参加者の皆さまへお送りしています。

4区画

5区画

3区画

2区画

1区画



# 森づくり作業の5年間

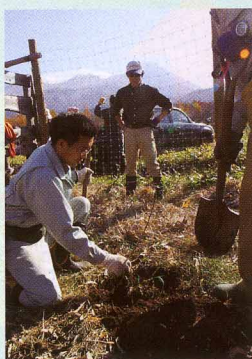
## 第二次回帰作業 平成15年(2003)～19年(2007)

原生の森の再生を目指す森づくり作業が始まってから10年が経ちました。何もかもが手探りだった初めの5年間、そこには高密度に生息するエゾシカの存在など多くの課題、そして新たな発見がありました。それから5年、失敗と成功を繰り返しながら知床の自然に挑み続ける森づくり作業の5年間を振り返ります。



⑤ 苗畑で葉を広げる広葉樹の苗木。

⑤ 苗畑作業。根づくりのための床替えを行う。  
⑥ 植樹作業。一本一本を大切に植え込んでいく。



### 豊かな森への第一歩

## 広葉樹を育てる、植える

100平方メートル運動地の中にあるふたつの苗畑で苗木を育てています。運動地やその周辺で採取した種をまき、日々の水やりや草取り、そして移植に耐えられるようにするための根づくりなどを行いながら大切に育てています。これらの苗木たちは、生まれてからの数年間を、知床の大地に植え付けられる時が来るまでこの苗畑の中で過ごすのです。

苗畑で育てたオヒョウ・ハルニレ・キハダ・ミズナラなど17種類約6,000本の広葉樹の苗木をこの5年間で運動地各地のシカを防ぐ柵（防鹿柵）の中に植え付けました。森づくり作業の10年間で植えられた広葉樹の苗木はおおよそ1万本にもなります。

植樹作業は、たくさんの皆様のご協力をいただいております。手にとったその一本一本が、100年、200年先に広がる森の第一歩となっていきます。

### 強風を受け止める 防風林をつくる

苗畑の中では、人の背丈より高い3～5メートルほどの大きさの樹木の育成も行っています。これらの大きな木は、種から育てたものではなく、森づくりを開始した当初、まだ密集して生えていた広葉樹の林から、いくつかの木々を木の生えていない草原などに移植する目的で掘り取ってきたものです。移植するためには苗畑で一時的に木を休ませる必要があり、これらの木々を「養生木」と呼んでいます。そして数年間を苗畑で過ごした養生木は、シカに幹の皮を食われないように保護ネットを巻き付けることで防鹿柵のない場所にも植えることができます。

この5年間で養生木約40本を風が強く吹き抜ける場所に移植しました。背の高い木を列にして植えることで発揮される防風効果が、周りの小さな木々の生長を助けてくれることを期待しています。



移植後には、樹皮保護ネットを巻かなければならない。



大苗を掘り取る。



防風林をつくる。クレーンを使う大掛かりな作業。





## シマフクロウがやってくる カエル池を囲う

平成10年(1998)、シマフクロウなど他の生き物のエサを増やすことを目的にエゾアカガエルが産卵するための池をつくりました。その後毎年、エゾアカガエルやエゾサンショウウオの産卵と生育が確認されています。平成16年(2004)には、夏場の干上がりを防ぐために近くの沢から水を引きました。

また、池の周辺にヤナギを育て、シマフクロウの止まり木をつくるという計画でしたが、シカの影響でなかなかうまく進みませんでした。そこで、平成17年(2005)に、池の周りを囲う防鹿柵を建てました。今後は、池の中の生き物とともにその周りにもより豊かな生き物と営みが始まってくれることでしょう。



カエル池。水面下には多くの生物が息づいている。



この防鹿柵は自然教室の子どもたちが建てた。



産みつけられたエゾアカガエルの卵。



## シカの侵入を防ぐ 防鹿柵を建てる、維持する

広葉樹の苗木を育てることができるのは高さ2メートル以上のフェンスで囲われた防鹿柵の中だけです。原生の森を目指す森づくり作業には、シカの侵入を防ぐための防鹿柵が重要な役割を担っています。

運動地には、防鹿柵が16ヶ所に設置されています。2メートル四方の小さな柵から5ヘクタール以上の大きな柵までその大きさは様々です。また、広葉樹の苗木を育てるため、その広葉樹を植え込むため、もともとある自然の森を保護するため、河畔の林やかたて植えられた人工林を囲いシカの影響をなくした状態での植生

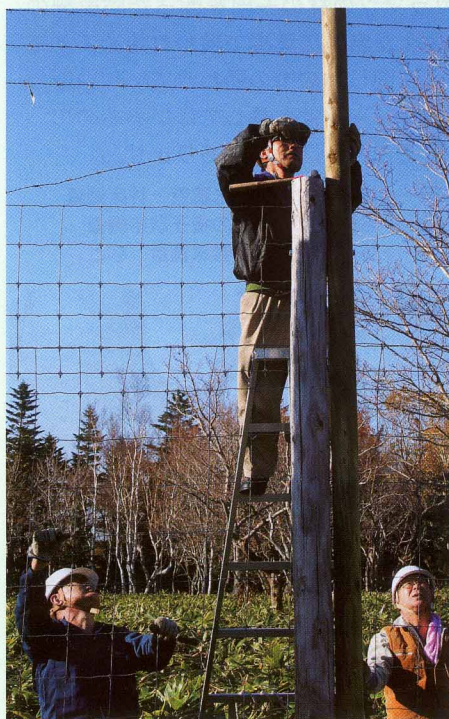
の推移を調べるため、などそれぞれに目的をもって配置されています。

この5年間に3つの防鹿柵を新設し、5つの柵の拡張を行いました。中でも、平成15年(2003)に運動地内で最も大きい5.3ヘクタールの防鹿柵が完成したことで、たくさんの広葉樹の苗木を植樹することができるようになりました。この防鹿柵の中に植えられた苗木は5,000本以上にもなります。

そして運動地各所に設置されている防鹿柵の見回りは欠かせません。特に台風や強風の後などは、風や倒木によって防鹿柵が壊れていないかを確認し、異状があればすぐに補修を行っています。万が一にもシカが柵の中に入ってしまうように、防鹿柵の中で育つ苗木や自然に生長してきた知床の木々を守るため、防鹿柵の維持管理に努めています。

また冬の間、この知床にはたくさんの雪が降り積もります。積雪の高さも考慮して設計されている防鹿柵ですが、風向きによっては柵の高さに迫るほどの雪が積もることが数ヶ所で確認されました。そうするとシカが簡単に柵を越え中に入ってしまうため、必要な場所の柵の高さを増す「かさ上げ作業」を行いました。

知床連山から吹き下ろす風、オホーツク海から吹き上げる風、人の想像を超える複雑な自然の条件からひとつひとつを学びながら森づくりを進めています。



柵のかさ上げ作業。高さ3メートルのフェンスの上にパラ線を張る。



場所によっては柵の高さを超えるほどの雪が積もる。



防鹿柵の支柱を立てる。





シカに破られないようにネットを2重に巻く。樹皮剥ぎされた木。シカにネットを破られることもある。

## シカとの戦い 広葉樹を守る

冬、木の樹皮はシカにとって貴重な食料となります。しかし、木の幹の回りを一周むかれてしまうと、その木はやがて枯れていきます。

シカの樹皮剥ぎを防ぐために金網やポリエチレン製の樹皮保護ネットなどをシカが好んで食べる樹種を中心に巻いています。その数は約800本、この内約600本はこの5年間で保護したものです。広葉樹の母樹やシマフクロウが営巣できるような大木を残していくための取り組みでもあります。しかし、約850ヘクタールある運動地の中のわずか800本に過ぎません。年々、樹皮剥ぎによって枯れていく木は増えている状況ですが、将来的な維持管理の労力も考慮すると際限なく保護ネットを巻いていくことができないのが現状です。ここ数年は、これまで巻いてきたネットの交換や補修を中心に進めています。

## 「森林をモニタリングすること」

森林再生専門委員 日浦 勉

(北海道大学苫小牧研究林長)

「風林火山。閑かなること林のごとく、動かざること山のごとし」という戦国時代の自然認識は間違っている。森林はダイナミックで喧しい生物間の相互作用に満ちているし、火山噴火や土石流は数十年に一度という時間スケールで起こるものだ。このような事実は、近年のリモートセンシング技術の発達によって解析可能な時空間スケールが向上したためだけでなく、なにより個々の現場で地道な観測作業が継続されてきたために明らかとなったものである。大気中の二酸化炭素濃度の上昇に伴う地球温暖化も、もとはと言えばキーリングさんという人がハワイの孤島で毎日気球を上げて空気を採取し、分析し続けるという地道な作業を数十年にわたって継続したからこそ明らかになったのだ。

じゃあお前は何をやったのかと問われても、たいしたことは何もやってない。中学生時代には通学路で3年間毎日野鳥のルートセンサスを行った。それを博物館の機関誌に発表もした。でも温暖化が発見できたわけではない。檜原神宮という鎮守の森に棲む鳥の個体数の季節変化が分かっただけである。何故か？私の問題意識が希薄だったことと、観測期間が短かったからである。大学に就職してからは毎年樹木開花の変動を調べたり、毎月樹木直径の太り具合を調べたりもしている。論文になったものもあれば、まだなっていないものもある。まして世間を揺るがすような発見は、まだない。一人の研究者が10年観察した程度ではたかが知れている。

しかし！これが100人いたらどうだろう。100年やったらどうだろう。単純に100倍の成果が上がるだけではないはずである。問題意識を明確に持っていれば、そこからわくわくする自然のパターンが必ず見えてくるだろう。それだけではない。シカの増加、外来種の侵入、分断化、窒素飽和など、日本中の森は様々な問題に直面している。そこで我々がまずやるべきはじっくりと腰を落ち着けてよく観察し、これを正確に記録することである。そしてそれを可能な限り継続し、仲間と手をつなぐことである。そうすればきっと、このような問題にも的確に対処する準備ができるはずである。まして運動地は人が積極的に手を加えてできた場所である。この知床の森がどう変化していくのか、正確に見つめ続けることが手を加えた者の責務だろう。

## 森づくりの変化を知る 森を調べる

森づくり作業の中では、過去の作業結果を評価するためのモニタリング調査を行っています。例えば、防鹿柵の中で自然に生長してくる樹木を調査する時も、同時に柵の外でも同じ調査を行います。人が自然に対して手を加えた場所、加えていない場所を比較することで、この森づくりの方法が果たして間違っていないのかどうかを確かめながら、常に自然に対して謙虚な姿勢で作業を進めています。

10年前、カラマツの林の一部を囲った防鹿柵の中は、自然に生えた若い広葉樹で覆われ始めてきています。しかし、同じ林の中の囲われていない部分では、針葉樹のトドマツは生長してはいるものの、広葉樹を見かけることはほとんどありません。

- ◆主な調査項目
- 防鹿柵内外の毎木調査・林床調査
  - 各調査プロットの種子散布調査
  - 防鹿柵周辺の積雪深調査 など



種子散布の状況を計測する森の番人。約10年間シカの侵入を許していないこの防鹿柵の中は若い広葉樹に覆われている。



# 生物相復元の5年間

## 第二次回帰作業 平成15年(2003)~19年(2007)

この森に住んでいた生物相の復元の第一弾として、運動地を流れる川にかつては棲んでいたサクラマスに蘇らせる取り組みを行っています。

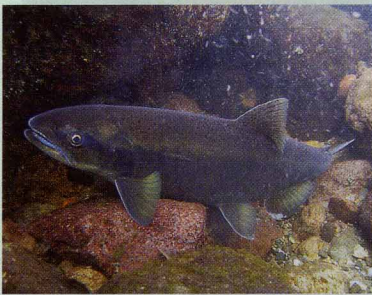


平成18年(2006)、北海道森林管理局によって改修された岩尾別川支流の河川工作物。赤線はかつてのダムの高さ。

### サクラマス、再び…

### 復活の兆し見られず

サクラマスの復元に向け、平成11年(1999)から3年間、運動地を流れる二つの川に合計で33万粒の卵と10万尾の稚魚を放流してきました。しかし、いったん海へ出た後に産卵のため川へ帰ってきたサクラマスの遡上確認数は、毎年行っている潜水調査によると、最大で二つの河川を合わせても10数匹という結果でした。現在でも、次の世代のサクラマスが帰ってきていますが、調査によるとその数は両河川合計でも1~2匹といった状況です。



海から戻ってきたサクラマスのメス。

サクラマスが再び定着できない理由として海での減少や河川環境の悪化、ダムなどの工作物によって遡上が妨げられ、産卵環境が狭められてることなどが考えられています。

### 川が蘇る

### 河川環境の改善へ

サクラマスの自然復元の取り組みを始めてから10年、この間、川を取り巻く状況は少しずつ改善の方向へと進んでいます。この運動からもダムなど工作物を管理する関係諸官庁への働き掛けを続けてきた他、知床が世界自然遺産に登録されたことで運動地内を流れる岩尾別川においても数基の工作物が改修され、魚が上流へと上れる状況が生まれ始めてきています。

また、岩尾別川には、シロザケやカラフトマスを捕獲するための堰堤があり、魚の遡上の障害となっていました。この堰堤は平成18年(2006)に(社)北見管内さけ・ます増殖事業協会によって改良され、魚が上流へ上がることが可能となりました。これまで、この運動で行っていたサケマスを買上げ上流に放流するという取り組みは、現在、地元の自主的な取り組みとして引き継がれています。少しずつ、サクラマスを含む多くの魚にとって住みやすい川が戻り始めようとしています。

## 「知床の森、川、海とつながる生き物たちの営み」

森林再生専門委員 青井 俊樹

(岩手大学農学部共生環境課程教授)

「森は海の恋人」。このキャッチフレーズを聞いたことがある方も多いと思います。これは、宮城県の気仙沼湾でカキの養殖を営んでおられる漁家の畠山重篤さんが実践を持ってとなえた言葉です。今から20年以上前、気仙沼湾は赤潮にまみれた瀬死の海でした。稚貝の生産量・移出量では全国の圧倒的シェアを占めていた気仙沼のカキも、当時は絶滅に瀕していました。そんな頃、畠山さんは海を豊かにするには、海に注ぐ川と、さらに川につながっている陸(森)を豊かにしなければいけないのでは?と思いつき、湾に注ぎこむ気仙川の源流部にある室根山(岩手県)に、仲間の漁民とともに広葉樹の植林を始めました。当初は科学者もお役所も相手にしない中、営々と広葉樹の森を作り続けた結果、今や気仙川は渓流魚の宝庫として知られるような美しく豊かな川となり、その水が注ぎ込む気仙沼の汽水域をも、豊饒の海と変えていったのです。その結果、気仙沼のカキの稚貝生産は見事息を吹き返し、現在では全国のカキの稚貝生産量の過半数を占めているそうです。

知床の森と海の間にも、たくさんの川を通して同じことが言えるに違いありません。知床の森が産出する豊かなミネラル分等が川にしみ出し、それが渓流魚やさらに知床半島周辺域の海に多くの海藻や動物たちの生育を促しているはず。そして、知床では夏から秋にかけて、サケマス類が大量に戻って来

ます。その一部は川を溯って産卵し、親魚は朽ち果てて森に帰っていくわけです。しかし最も有効に、サケマスがもたらす栄養分を森に還元してくれるのは、それらを食物とするヒグマや、シマフクロウ、オジロワシなどのまさしく知床を代表する生き物達です。彼らが森に持ち込んでくれる、窒素やリンといった栄養素が、どのくらいの量なのかはまだ未解明ですが、アメリカの研究ではサケが上って来る河川とそうでない河川の流域に成立する森林では、前者の方が樹木の生長が良好であるという結果も出ているようです。おそらく知床の豊かな原生の森は、こういったサケや、さらにクマや猛禽類のおかげで、他の地域より一層豊富な栄養分が海から還元されていたに違いありません。その循環を断ち切ることなく、未来につなげていくことが、知床の森を豊かな状態で保つことに必ずつながるはずです。

森が育てた土から栄養分が川に流れ、それを川や海の生物達が利用し、そしてヒグマやシマフクロウ達が再び川に帰って来たサケやマスに森に持ち込むことにより、森が生み出した栄養分が再び還元される、こんなすばらしい循環を今後も保ち、さらにより良いものにしていくために、これからも私達は協力し合い、少しでも早く知床により豊かな森の再生をはかり、そしてサケマスがもっとたくさん戻って来られるような海と川の保全を目指して行きませんか?



# しれとこの森交流事業 の5年間

第二次回帰作業

平成15年(2003)~19年(2007)

知床の森の様子と、この森で行われている森づくりの作業を運動参加者の皆さんに伝えるために、毎年しれとこの森交流事業を開催しています。知床自然教室、森の集い、森づくりワークキャンプ、子どもから大人までこの5年間にのべ665人の皆さんに参加していただきました。



## 知床の森で暮らす 知床自然教室

夏、子どもたちが知床の森で一週間を過ごします。地元斜里町、そして全国からの子どもたちがこの森に集まり、知床の自然の中で暮らします。

電気・ガス・水道、普段の生活の中で当たり前に使っているものがない森の中でも、みんなで力を合わせれば生きていけることを知り、そして自然の中で生きることの厳しさも学んでいきます。この5年間でのべ157人の子どもたちがこの森で思い出の夏を過ごしていきました。



开拓小屋の前で全員集合。



食事作り。



雨の日でもみんな元気。



川をさかのぼる探検へ。

## 小さな町の大きな挑戦

# 「しれとこ100平方メートル運動30周年記念事業」を開催

平成19年3月17日 斜里町公民館ゆめホール知床

平成19年(2007)、しれとこ100平方メートル運動は30周年を迎えました。昭和52年(1997)、知床国立公園内の开拓跡地の保全を目的に「知床で夢を買いませんか!」と全国に呼びかけ始まったこの運動は、知床の自然保護に貢献するだけでなく、日本のナショナル・トラスト運動の先駆けとしても大きな役割りを果たしています。

平成19年(2007)3月17日、30周年を記念してこの運動の歴史とその役割りを振り返り、そしてこれからの課題や方向性を話し合う記念事業を斜里町公民館ゆめホール知床で開催しました。

運動当初、朝日新聞の「天声人語」でこの運動が取り上げられ大きな反響を呼びました。その執筆者である元朝日新聞論説委員の辰野和男さんによる特別講演で幕を開けたこの記念事業は、運動の草創期を支えた世代とこれからを担う世代のシンポジウムなどが行われ、集まった200名以上の方々は、過去と未来、それぞれにつながつたこの運動の奥深さを改めて感じるとともに、100年、200年先の未来の知床の森へと思いを馳せる一日となりました。



かつての自然教室参加者による発表。現在でもリーダーや指導員として自然教室に関わり続けている。





## 知床の森がにぎわう しれとこの森の集い

しれとこの森の集いは毎年9月中旬に開催される記念植樹祭です。この5年間で約452名の皆さんが参加して、アカエゾマツなどの針葉樹の苗木約2,200本が植えられました。また、植樹の前には、恒例の森の番人と歩く森歩きツアーやネイチャーゲームが行われ、参加した皆さんは運動地の森をそれぞれの目で見つめていきました。



ネイチャーゲーム。どこにいるかな？



世代を超えて未来の森を。



森の番人による植樹指導。



## 知床の森で働く 森づくりワークキャンプ

毎年秋、11月初旬に開催される森づくりワークキャンプ。この知床の森に全国から集結した若者男女10数名が5泊6日の日程で森づくり作業に汗を流します。苗木の植樹や大きな苗の移植、防鹿柵の新設や補修、森づくりに欠かせないいくつかの作業を森の番人指揮のもと、着々とそして堅実にこなしていきます。

この5年間で約56人の皆さんがワークキャンプに参加しました。携わった作業のひとつひとつは、未来に広がる知床の森の礎となっていきます。



防鹿柵のフェンスを伸ばす。その長さ100メートル。



防鹿柵の支柱を立て直す。



防鹿柵のフェンスを打ち込む。

## 交流事業参加者の声

森づくりワークキャンプ参加者 高柳多可子さん



平成15年(2003)、第7回ワークキャンプからご夫婦で5年連続の参加。三重県在住。

エゾシカの円らな瞳が、幾つもじっとこちらを見ている。11月初め、雪を被った知床連山からの風は冷たい。そんな中、「せえの」「そおれ」と、ワークキャンプ参加者とスタッフ合わせて15名の掛け声が響く。苗畑で育てた養生木の移植。やっと25本。小さな林が、広大なササ原の中にできた。ここに防風林を作り、その風下に知床生まれの広葉樹をいくつか植えたい。ここに生きる動物達が安心して棲めるように。

「あっ、見て見て。あれ」オジロワシだ。みんな手を休め、大空を仰ぐ。エゾリスも木の枝で遊ぶ。「クワックワッ」今度は白鳥の渡りだ。またまた作業の手が止まる。

昼食。スタッフ心尽くしの弁当はおいしい。「あそこは二次林。今生まれた木は寿命が短い。一度、人が手を入れた所は…」と、森の番人の話を聞きながらの食事。

夕日がオホーツク海を真っ赤に染める。ササの落ち葉で、スコップの土を落としながら、「石が多くて、穴掘り、大変だったね」「わたしの植えたコクワ。いつ実が成るかな」みんな、一日の作業の話に夢中になる。

すっかり日が落ち、近くの温泉で疲れを癒す。それからみんなで囲む夕食は最高。若いスタッフが語る夢を聞きながら…。

床に入り考える。「人が鍬を入れる前は、どんなだったかな。知床の原始の森って」うー、ねむい。「ようし、明日もがんばるぞ」



大苗を掘り取る高柳さん。



平成20年(2008)

# しれとこの森交流事業のご案内

知床の森にふれてみませんか？

今年も3つの企画で皆さんをお待ちしています。  
どうぞお気軽にご参加ください。



## 第29回 知床自然教室

知床の森で暮らす一週間。全国から集まった仲間と  
いっしょに知床の海・山・川へ飛び出そう！  
忘れられない夏を、ここ知床で。

日 程：平成20年7月30日(水)～8月5日(火)

参加費：35,000円（現地までの交通費は別途必要です）

対 象：小学4年生～高校3年生

定 員：40名（先着順）

締切日：7月9日(水)

お問い合わせ：知床財団

Tel : 0152-24-2114

Fax: 0152-24-2115



## 第12回 しれとこ森の集い

午前中は森の番人の案内で森づくり作業地の見学、  
午後は植樹祭を行います。（午前のみ、または午後のみ  
の参加も可能です）ぜひご参加ください！

今年から森の集いの開催は10月に。

植樹する木も針葉樹から広葉樹に変更し、広葉樹の苗木を防  
鹿柵の中の草原へと植え込みます。

日 程：平成20年10月19日(日)

（今年から日程が変更になっています）

参加費：無料

お問い合わせ：斜里町役場自然保護係

Tel : 0152-23-3131

Fax: 0152-22-2040



## 第12回 森づくりワークキャンプ

合宿形式でスタッフと寝食をともにしながら森づく  
り作業に打ち込む6日間。

「森づくり」の奥深さ、そして楽しさを実感する毎  
日を過ごしてみませんか？

日 程：平成20年10月30日(木)～11月4日(火)

参加費：18,000円（現地までの交通費は別途必要です）

対 象：18歳以上 定 員：12名（先着順）

締切日：10月20日(月)

お問い合わせ：知床財団

Tel : 0152-24-2114

Fax: 0152-24-2115



# 運動地の公開へ向けて

この運動では、三つの長期全体目標のひとつとして「トラスト資産としての運動地の適正な公開と保全のシステムを構築する」ことを掲げています。この「公開」とは、100平方メートル運動地を実際に訪れていただくことでこの運動をよりたくさんの方々に伝えることができる仕組みをつくることです。この公開に向けた取り組みを平成17年度(2005)から行っています。

## 運動の輪を広げるために

これまでも、しれとこの森交流事業として知床自然教室やしれとこ森の集い、森づくりワークキャンプを開催し、たくさんの皆さまのご参加を得て運動を伝えていく取り組みを行ってきています。ただ、これらの交流事業は、皆さまのご寄付を基にした事業費によって運営されており、もっと多くの方々へこの運動を伝えていくためにも、今以上の拡大は難しい状況となっています。そこで、よりたくさんの方々へこの運動を伝え、さらなる運動の輪を広げていくことを目的として、必要経費などを負担していただく形での運動地公開の方法を模索しています。

## これまでの取り組み

### ● 森づくり入門ネイチャーウォーク

一日の森歩きの中で、この森の自然と運動の歴史に触れ、そして実際に森づくりの作業にも携わっていただく運動参加者を対象としたプログラムです。参加した方々からは、知床での開拓の歴史に興味を持った、現場で活動するスタッフの大変さを知った、などたくさんの生の声をいただくことができました。



ネイチャーウォーク。運動地から眺める知床連山。

### ● 学校向けプログラム

毎年、地元斜里高校の1年生は、自然体験学習の一環として運動地を訪れ植樹作業を行っています。地元で生まれ育った生徒でも、あまり知床の自然に関心がないのが実情ですが、現場に来てみるとみんな熱心に取り組んでいます。将来この森に一本の木を植えたことを思い出してもらえればと思います。その他にもウトロ中学校など他の学校の受け入れも行っています。



斜里高校の生徒。掘り取った苗木と記念撮影。

### ● 企業・団体向けプログラム

イオン1%クラブの子どもたち約30人は、毎年知床を訪れ、知床の自然を学びながら過ごす数日間を送ります。深い森の探検、苗畑の草むしり、子どもたちは都会



イオン1%クラブ「イオンしれとこエコツアー」の子どもたち。苗畑の草むしりを終えて。

の生活から遠く離れた体験をしながらも、かつてここに人が住み、そして今もここで森づくりの取り組みが行われていることを知っていきます。

また、昨年から(社)日本植木協会青年部会の方々約40名がこの知床を訪れるようになりました。わずか1日で防風柵を2基も完成させてしまうなど、全国各地で造園業に携わる方々の力には、スタッフ一同感嘆の声を上げずにはいられませんでした。その他にも、企業や教職員の研修の受け入れも行いました。



日本植木協会青年部会の一行。造園業界のプロが知床に集った。

### ● スノーシュー・歩くスキーコースの設置



冬の運動地。スノーシュー・歩くスキーコース。

冬季の運動地の公開の方法として、知床自然センター周辺の運動地にふたつのコースを設置し、知床を訪れる皆さまに利用していただきました。コース周辺で見られる知床開拓の痕跡や森づくり作業の成果などを紹介する案内地図を手に歩くことで、より運動を知っていただくための試みです。

## 適正な公開に向けて

運動地の公開に向け、公開の基本的なルールとして「公開の原則」を提示しました。保護と利用、安全管理、クリアすべき課題は少なくありませんが、運動地をより良い形で多くの方々に見ていただき、運動への理解を深めていただくためにこの取り組みを継続していきます。積雪期以外のコース設置など運動を伝えていくための新たな方法を今後も検討していきます。

皆さまの厚いご支援によって守り育てられているこの運動地を汚すことのないような、利用と保護のバランスのとれた公開を目指していきます。

### 100平方メートル運動地・公開の原則

- ▶ しれとこ100平方メートル運動の歴史と趣旨を理解していること
- ▶ 100平方メートル運動地の生態系保護や森林再生の方針に反しないこと
- ▶ 運動地内では、安全に十分な配慮をすること



## エゾシカ特集

# 森林再生の前に立ちはだかるシカたち

「100平方メートル運動の森・トラスト」がスタートして10年、この間森づくりを進める上で、最大の障壁となってきたのが「エゾシカ」であり、作業の大部分はエゾシカ対策に費やされてきたと言っても決して過言ではありません。

## 防御によるシカ対策はもう限界！

この10年間は、平成9年(1997)「100平方メートル運動の森・トラスト」がスタートした際に定めた「当面20年間は、シカを人為的に減らすことは考えずに森づくりを進める」というエゾシカ対策の基本方針の下で、防鹿柵やネットによる樹木保護など防御を中心とした対策を進めてきました。しかしシカが一向に減少する気配のない中で、さらに新たな柵設置や樹木保護を進めることは資

金・労力面でも既に限界となっています。それどころか、今後はこの10年間に整備した柵やネットの老朽化が進み、これらの維持管理が森づくりの現場に重くのしかかります。一度でも防鹿柵内にシカが侵入し、苗が食べられてしまえば、これまでの苦労は水の泡となります。柵やネットの修繕や取り替えを計画的に行っていく必要があります。



## 植えてもすぐ食べられる広葉樹の苗

現在運動地では広葉樹の苗を植樹しても、防鹿柵の中でしか生存できません。柵外で育つのはシカが好ま

ないアカエゾマツ(針葉樹)などの苗のみです。運動の目標は針葉樹と広葉樹が適度にまじりあった知床本来の森(針広混交林)の復元であり、そのため運動地の苗畑では広葉樹の苗を育ててきました。防鹿柵内の苗畑で種から大切に育ててきた広葉樹の苗の一部は既に大きく生長し、定植を待ばかりの状態です。防鹿柵外に移植すれば、即シカの餌食になることは明

らかな中、いつかエゾシカの数が少しでも減るまでと移植を先延ばしにしてきました。現状では全てを移植するだけのスペースのある防鹿柵はない中で、苗に愛情を注いできた番人や作業員の苦悩ははかり知れません。苗づくりも含め、森づくりは長い時間を要する作業が多くありますが、作業に大きな影響を与えるエゾシカの動向を予測しつつ、作業計画を立案することは大変困難であるのが実情です。



## シカにとって暮らしやすい運動地

草原状になったかつての農地の中に、休息や隠れ場となる林がモザイク状に残る運動地周辺は、越冬地としても、子育ての場としてもこれ以上ない好条件が揃っており、エゾシカにとっては大変暮らしやすい場所です。年間を通じて高密度に生息するため、その影響が特に顕著に見られます。継続的にシカに食べられることで、ササなど下草の草丈が著しく低くなっています。苦味や有毒成分を含んでいたり、棘があって食べ

にくいなどの理由でシカが好まない植物、在来種ではハンゴンソウやフクジュソウなど、外来種ではアメリカオニアザミやジギタリスが目立つようになりました。また積雪期の樹皮食も深刻です。このまま樹皮食による枯死が進むと知床連山から吹き下ろす強風から運動地を守る役割を果たしている周辺の自然林の衰退も懸念されます。

これら自然林の防御も必要になってきています。





## シカをめぐる新たな動き

平成17年(2005)に知床は世界自然遺産に登録されました。エゾシカの管理は遺産地域の保全管理上でも重要な課題です。環境省は一昨年知床半島エゾシカ保護管理計画を定め、専門家からなる知床世界自然遺産地域科学委員会エゾシカワーキンググループの助言を得ながら具体的な管理手法の検討や調査を進めています。

具体的な動きの一つとしてシカの密度操作実験があげられます。これは個体数増に直接かかわるメス成獣を中心に個体数調整を実際に行い、その効果などを検証するというものです。シカの影響が著しい地域として4ヶ所の実験候補地が選択されました。その中でも最も対策が急がれるとされた知床岬地区で昨年12月、1月と今年4、5月に既に実験が実施され、88頭のメス成獣が銃猟によって捕獲されています。

4ヶ所の候補地には運動地を含む幌別・岩尾別地区もあげられており、世界自然遺産登録地のエゾシカ

管理手法として個体数調整が検討される中、これまで運動地内でのエゾシカ対策について人為的な個体数調整はしない方針を掲げていた斜里町としても、方針の再検討を行いました。

平成18年11月、植物生態や野生動物の専門家と地元有識者で構成され、森づくりの計画づくりを行う森林再生専門委員会において、「現状ではエゾシカ対策の方針転換もやむなし」との認識で一致、この結果を受けて斜里町は方針の転換を決断しました。運動地における新たなエゾシカ対策の方針は「生態系の調整能力の活用を基本とするが、植生への著しい影響が避けられない場合は個体数調整も含めて検討する」としました。

今後は新たな方針の下で、知床世界自然遺産地域科学委員会等での議論も踏まえ、遺産地域を管

理する環境省・林野庁・北海道とも連携をとりながら具体的な対応策を検討していくことになります。

しれとこ100平方メートル運動がスタートした30年前、運動の目標を達成する上で、これほどエゾシカが障害となることは想像にも及びませんでした。しかしながら、近年のエゾシカ急増の原因は、必ずしも自然現象とは言い切れず、人為的な影響もその要因の一つであると考えられます。シカの急増は「人の手で改変された自然を以前の状態に戻す」ことを目指す運動に課せられた宿命的な試練なのかもしれません。



## 「阿寒国立公園におけるエゾシカの保護管理」

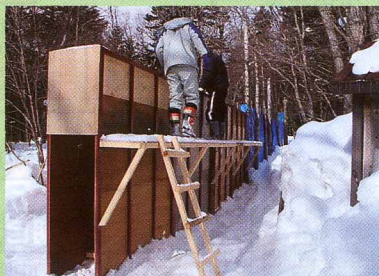
森林再生専門委員 宇野 裕之 (北海道環境科学研究センター自然環境部野生動物科)

阿寒国立公園周辺では、1980～1990年代にエゾシカの生息数が著しく増加したと考えられています。ヘリコプターを使ってカウント調査を行うと、1平方キロメートルに90頭以上のエゾシカが集中して越冬している地域がみられました。1990年頃からハルニシ、オヒョウやハシドイなど落葉広葉樹の枯死木が目立つようになりました。雪解けを待つ3月から4月にかけて、エゾシカによってぐりと樹皮を剥かれてしまうためです。約3,600ヘクタールの森林を所有する(財)前田一步園財団が調査したところ約96,000本の樹木が樹皮剥ぎ被害を受けていることが明らかになりました<sup>1)</sup>。森林の次世代を担う稚樹が消失していることも判りました。

母樹を残すための対策として、主に単木のネット巻きによる保護が行われました。1999年からはビートパルプ(絞りかすを固めたもの)を給餌することによって樹皮剥ぎを防いできました。しかし、餌を与えることは結果としてエゾシカを増やすことにつながってしまいます。

そのため同時に駆除を行いました。エゾシカは学習して夜間のみ餌場に出るように行動を変化させてしまいました。2005年からは囲いワナを用いた生体捕獲が行われています。捕獲されたエゾシカは地元釧路市の一時飼育施設に運ばれ、主に食肉として活用されています。

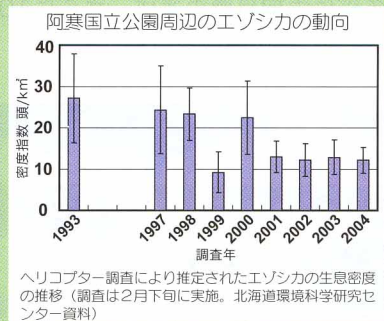
対策とは別に固定調査区における森林植生の調査を継続してきました。周辺地域で積極的に個体数管理を実施したことから、1997年以降エゾシカの生息密度が減少しました(下図)。それに伴って落葉広葉樹の稚樹が少しずつ増加していま



エゾシカの生体捕獲用のワナの一例  
(平成18年2月、前田一步園財団の取り組みを視察)

す。林床植物の一つであるミヤマエンレイソウの開花個体が増えるなど、植生の回復傾向が観察されています。森林植生を保全し、その地域の生物多様性を低下させないためには、エゾシカの個体数管理が必要です。捕獲したエゾシカは「ゴミ」として厄介物扱いするのではなく、持続可能な「資源」として利用していくこと、同時にエゾシカの生息動向と植生の変化について、継続的にモニタリングすることが重要だと考えています。

1) 高村隆夫、2000. 阿寒湖カルデラ・エゾシカ奮闘記(1). 北方林業, 54: 25-28.





# 森林再生計画

原生の森と野生の営みを再生する



## 不変の原則

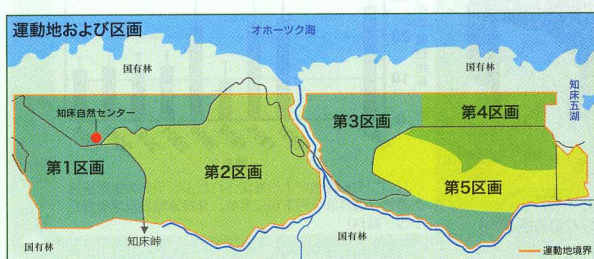
不変の原則は、野生動植物研究の専門家5名と地元の有識者2名からなる専門委員会議で定められた「**森の憲法**」です。

- 植林木の生長によって余剰の樹木が生じても、運動地の系外への人為的な持ち出しは認めない。
- 自然に再生しつつある二次林では、森づくりのためであっても、大規模な森林構造の急変は行わない。
- 再生計画の実施にあたっては、国立公園および自然教育の場としての位置づけに配慮した森づくりを進める。
- 5年一巡の回帰作業方式をとり、過去の作業結果を評価するモニタリング調査を欠かさない。
- 作業計画の立案や見直しは、定期的に開催する専門委員会議に諮り、承認を得なければならない。
- 野生動物とその営みの再生にあたっては、遺伝子汚染を防ぐこと。減少種の回復は、現地の個体群からの増殖を基本とする。また、絶滅種の復元では、遺伝的にも地理的にも極力近い個体群からの再導入を原則とする。



## 回帰作業方式

しれとこの森づくりは、運動地全体を5つの区画に分け、5年で一巡する回帰作業方式によって、作業が進められていきます。この作業を4回繰り返した20年後に中期目標の達成、さらに100～200年後には長期目標の達成を目指します。



## 長期全体目標 (100～200年後)

- 1) 本来この地にあった原生の森を再生する。
- 2) 本来的な野生生物群集と自然生態系の循環を再生する。
- 3) トラスト資産としての運動地の適正な公開と保全のシステムを構築する。



## 中期目標期間中の方針 (平成29年まで)

- 作業の前後にモニタリング調査を行うとともに、放置区を設けて再評価と計画の見直しに備える。
- 急増したエゾシカへの対応には、生態系の調整能力の活用を基本とするが、植生への著しい影響が避けられない場合は、個体数調整も含めて検討する。  
※平成19年(2007)改訂
- カラマツなど外来樹種については、森林再生の過程では活用するが、長期的には減少させる。

第一次回帰作業(H10～H14)

第二次回帰作業(H15～H19)

第三次回帰作業

H20年度 (2008) 第1区画	H21年度 (2009) 第2区画	H22年度 (2010) 第3区画	H23年度 (2011) 第4区画	H24年度 (2012) 第5区画
-------------------------	-------------------------	-------------------------	-------------------------	-------------------------

第四次回帰作業(H25～H29)

中期目標の達成 H29年(2017)

20年ごとの中期計画と  
方針の見直し・修正

長期目標の達成 100～200年後





# 森林再生専門委員会議

数百年先の未来を見据えた知床の森づくり、森林再生計画に基づく作業の方針や方向性は、動植物の専門家や地元の有識者で構成される森林再生専門委員会議の場で議論検討が行われています。



委員の現地視察。森づくりの現状を確認する。

## 未来の森の設計図 森づくりの計画を決める

毎年開催される専門委員会議では、その年ごとの森づくりの成果の確認と課題についての議論が行われます。そしてその結果を踏まえ、翌年の森づくり計画がこの会議の場において立案され、実行へと移されていきます。

各委員がそれぞれ専門の立場に立ち、様々な角度から議論が行われるこの会議は、知床の森づくりを進める中で重要な役割を果たしています。100年、200年先の未来の森は、科学的な知見と古くを知る地元からの意見に基づきながら、その設計図が描かれています。



### — 森林再生専門委員（平成20年現在） —

座長 石川 幸男（専修大学北海道短期大学  
みどりの総合科学科教授）

委員 青井 俊樹（岩手大学農学部共生環境課程教授）

〃 甲山 隆司（北海道大学大学院  
地球環境科学研究科教授）

〃 宇野 裕之（北海道環境科学センター  
自然環境部野生動物科）

〃 日浦 勉（北海道大学苫小牧研究林長）

〃 山崎 猛（運動推進本部副会長）

〃 綾野 雄次（運動推進本部役員、  
知床自然保護協会理事）

### 「知床の森づくりのこれからのために」

森林再生専門委員会議 座長 石川 幸男  
（専修大学北海道短期大学みどりの総合科学科教授）

私が「しれとこ100平方メートル運動」と関わりだしたのは1985年でした。それから20年以上が経過し、その間、森林再生専門委員として1997年の発足以来お手伝いしており、2006年からは初代の座長であった石城謙吉さんの跡を継いで同委員会議の座長を務めさせていただいています。

この運動のお手伝いを始めたころには、植物群落の現況を記録する仕事を主に行うとともに、ササや牧草に覆われた古い農地を森にかえすための試みを行っていましたが、そのうちにシカによる食害が目立つようになりました。80年代の後半からは森づくりの目的で植えられた樹木のなかで、針葉樹のアカエゾマツは除いて落葉広葉樹はすべて食べられてしまうようになりました。

こうした状況の中では、シカに特に樹皮を食べられやすいハルニシ、オヒョウやイチイといった重要な樹木の幹をネットで巻いて単木的に保護するほかに、小面積で森を囲うとともに植樹を行ったり、新たな樹木の定着を促す取り組みなどを行っています。森の番人を中心とした現地の皆さんにボランティアの多くの方が協力して、さまざまな取り組みが行われています。原始の森の復元にはまだまだ遠い状況です。

が、開拓当時に植えられたカラマツ林を囲う防鹿柵を設けたところ落葉広葉樹が生えだしました。冬に知床連山から吹き降ろす強風から樹木を守る防風柵の効果的な形と配置がわかってきました。苗畑では、この地に在来種の実生稚樹を生産できるようになるなど、少しずつ、さまざまな取り組みを行っています。

また私たちの運動地は知床世界自然遺産に含まれます。ご存知のようにこの冬から知床岬では、植物群落への影響を軽減するためにシカの個体数調整（捕獲）が始まりました。運動地を含む幌別・岩尾別地区も今後の捕獲の候補地になっていることから、捕獲した後のシカをどうするのかなど、運動の理念との整合性について考える必要があります。

運動参加者の皆さんは、シカの強烈な影響のもとでの森づくりがどのように進行しているか、大きな関心をお持ちだと思います。しれとこの森通信やホームページで上に挙げたような取り組みや課題はお知らせしていますが、どうかご意見をお寄せください。できれば、ぜひ現地を訪れて森の現状をご覧いただきたいと思います。これからの森づくりのために、皆さんのご意見が何よりも重要なのです。



# 第三次回帰作業計画 平成20年(2008)～平成23年(2012)の森づくり

原生の森を再生する取り組みが始まってから10年、この間様々な試行錯誤を繰り返しつつ森づくり作業を進めてきました。その中で多くの苦労を重ね労力を費やしてきたシカの圧力は今後なくなる見込みは現在のところ見えてきません。これからの5年間もシカとの戦いは続きますが、これまで積み上げてきた経験と蓄積を活かして、知床の森を守り育て伝え続けていきます。

## 森づくり作業 原生の森を夢見て

### ●モニタリング調査

これまでの森づくりの経過を検証し、未来の森づくりに必要なデータを蓄積していくために、継続してモニタリング調査を行います。

### ●苗畑の維持管理

これからも広葉樹の苗木の育成を継続して行います。ただし、現在ある防鹿柵の中で新たに植樹できる面積が残り少なくなっているため、苗畑で育成する植樹用の苗木の本数はこれまでより大幅に少なくなります。その他には、防鹿柵がなくても移植ができる大きな苗木の育成を継続し、運動地ではシカの影響で少なくなった種類の避難所としての育成も継続して行っています。



### ●防鹿柵・防風柵などの維持管理

これまで設置してきた16基の防鹿柵とその他の防風柵などの維持管理、補修を中心に作業を行います。たく



さんの思いが込められた一本一本の苗木、知床連山から吹き下ろす風を受け止めている自然林、水辺の生き物を育むカエル池、今この運動地で囲われている全てを今後もシカから守り続けていくために防鹿柵のメンテナンスに努めています。

### ●樹皮保護ネットの巻き替え

これまで保護してきた約800本の樹木の樹皮保護ネットの多くが耐用年数を迎え始めています。

今後はネットの巻き替えを中心に作業を進めていきます。



## 生物相復元 サクラマスの戻る川

### ●サクラマスの復元

この10年間、運動地を流れる二つの川でサクラマスを増やす取り組みを続けてきましたが、再び川へ帰ってくる魚の数は予想を大きく下回るものでした。その原因のひとつとして、戻ってくる河川が環境が悪化したことが挙げられていましたが、ここ数年でいくつかのダムが改修されるなど河川環境に改善の兆しがみられるようになってきました。サクラマスを含む多くの魚にとって住みやすい環境が少しずつ整ってきたことから、サクラマスの放流を再開していきます。また、これまでの経過と放流再開後の遡上状況を比較するためにモニタリング調査も継続して行います。



### ●河川環境のさらなる改善へ

これからも河川環境の改善に向け関係行政機関への働き掛けを行うとともに、地元の漁業関係者の皆さまとの連携と協力を図っていきます。





## しれとこの森交流事業・運動地公開 運動を伝えるために

### ●しれとこの森交流事業

これまで通り、運動参加者の皆さまと知床の森をつなぐ交流事業「知床自然教室」「しれとこ森の集い」「森づくりワークキャンプ」を継続して行います。中でも「しれとこ森の集い」は、開催を10月に移すとともに、植樹する樹種をアカエゾマツなどの針葉樹から広葉樹へと変更して行います。



### ●運動地公開

この運動をよりたくさんの方々に伝えるために、運動地公開のルールをつくり、運動地の公開を進めていきます。

## 「変わらぬことの大切さ」 森林再生専門委員 山崎 猛（100平方メートル運動推進本部副会長）

今年も、知床連山の残雪模様が美しい季節になり、穏やかな心で眺め見ることが出来てうれしい。

この光景は、55年前に私が15歳の春に見たものと何一つ変わってはいない。南北に長い裾野には農家が点在して、窓から漏れる電灯の明かりがほのかに揺らぎ、人の気配もあり何処か温かかった記憶があった。

その農家を結ぶ道を教科書や文房具を背負い岩尾別小中学校に通ったものだ。幌別地区と岩尾別地区の子供達が学んだ学舎も農家も今はないが、離農跡地は『しれとこ100平方メートル運動地』に変わり、全国の皆さんの善意の心が輪になって広がり、我が国の自然保護の原点ともなり現在に至っている。此处に、知床開拓者の歴史と、学び舎のあった事を町民の中からも今は、忘れ去られてきているのではないかと思われる。

当時の子供達は通学の行き帰りには、冬には自家製のカンジ

キや長い板を巧みに曲げたスキーを操り、低学年を轎に乗せ歓声をあげる光景を良く見かけ、声もかけた。その歓声は、渓谷をこだまして響き渡る。夏の午後には、大きな蔭を傘がわりにして遊び、雨や日差しを避けてもいた。

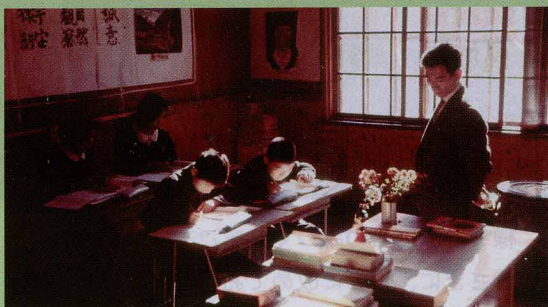
その学び舎の岩尾別小中学校は、昭和42年(1967)に廃校になってしまったが校歌に謳われた歌詞の

♪狭霧ははれて 原生林 山鳩鳴けば こだます  
文化の礎石固めんと……

学校はなくなったが校歌の精神を守り、知床連山の雪形も、太古の森に育みつつある緑の大地も、オホーツクを埋める巨大な流氷も、どれも永遠に失う事のない事を切に願っているかのように、生まれたばかりの初夏の雲が渓谷を這い上がり、稜線を越えて消えて行く。

現在の100平方メートル運動地、幌別・岩尾別地区では、昭和40年代まで農業や酪農を行う生活の風景が広がっていました。その中に子どもたちが通う岩尾別小中学校がありました。

当時、地元斜里町で文房具店を営んでいた山崎氏は、仕事のかたわら当時の生活の風景を数多くの写真に残しました。このコラムの写真は山崎氏の撮影・提供によるものです。



当時の授業の様子。



岩尾別小中学校の全景。



昭和29年(1954)に開校し、昭和42年(1967)廃校となった。

開拓当時の生活の様子やそこに広がる風景を過去と現在の写真を織り交ぜ綴られた写真集『知床開拓スピリット』（梅嶺レイ著・写真、柏船舎）が昨年出版されました。100平方メートル運動が始まる以前にもこの知床に人の生活と歴史があったことを改めて感じる事ができる一冊です。



# 知床の森づくりは皆さまに支えられています。 たくさんのご支援をありがとうございました。

この夢の森づくりが始まって10年間、多くの皆さまから様々なご支援をいただきました。平成15年(2003)～19年(2007)の第二次回帰作業の5年間において、約5,000人の皆さまからいただいたご寄付は8千6百万円にもなります。この10年間では、約12,000人の方から1億8千万円に達するご寄付をいただきました。

また、この5年間で約650人のボランティアの皆さまにこの森づくり作業のお手伝いいただきました。限られた人数の現場スタッフだけではとうてい成し得ないほどの作業量を担っていただいているこの力は、森づくりを進めるにはもはや欠かせないものとなっています。

財イオン環境財団には、平成14年(2002)から5年間、共同植樹の実施やそのために必要な防鹿柵の設置、植樹への参加、その他にも高額なご寄付をいただくなど多大なご支援を受けました。

(有)グリーンコップの皆さまには、森づくり開始当初から樹皮保護ネットを一部無償で提供いただくなどのご協力を受けています。

(社)日本植木協会会員の皆さまには、本業の技術を活かした防風柵の設置など、この知床の森づくりに貢献していただきました。

愛知県の劇団シンデレラの皆さまには、この知床での森づくりをテーマとしたミュージカルを、各地で上演していただいています。

(社)北見管内さけ・ます増殖事業協会の皆さまには、サクラマスの復元に向けた取り組みについて多くのご助言をいただきました。

斜里高校の生徒の皆さま、(社)斜里青年会議所の皆さま、斜里ロータリークラブの皆さまなど、地元斜里町の皆さまにも多くのご支援とご協力をいただきました。

昨年、平成19年度(2007)も、多くの方々のご厚意をいただきました。千葉県在住の方からの50万円の高額寄付や、還暦や退職の記念、お子様の誕生日にメッセージを添えてご寄付を下された方などたくさんのお気持ちをいただきました。

また、長年、この運動を内から支え続けた午来前町長と関根前副町長からも退職を機に高額のご寄付をいただいています。



様々な形でこの森づくりをご支援いただいたたくさんの皆さまに、ここに改めてお礼を申し上げます。  
ありがとうございました。

これからもどうぞよろしく  
お願いいたします。



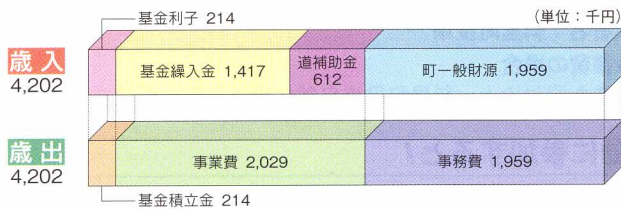
## 平成19年度決算

### ■保全管理事業

事業費は、運動地の下刈りなどで約203万円を支出しました。事務費は主に「しれとこの森通信」の印刷・発行費用で約196万円です。

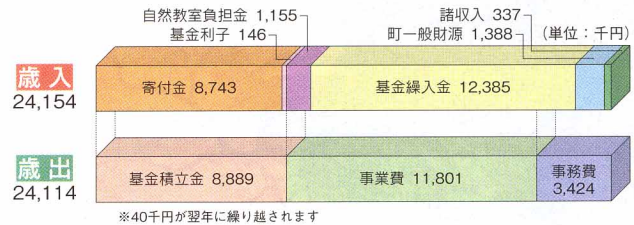
保全された土地の現状 (単位: ha)

運動地面積	861.90	保全済み地域	849.98
		(寄付金による取得地	459.26)
		(既存町有地	390.72)
		今後の取得対象地	11.92



### ■森林再生事業

森林再生のための事業費として、総額約1,180万円を支出しました。事業費の内訳としては、運動地での森林再生事業を知床財団に1,099万円で委託して実施したほか、シカ柵修繕等に41万円を支出しました。また、主な事務費はパンフレット等の印刷や消耗品類、受付事務員の賃金など約343万円です。



### ■森林保全基金の状況

国立公園内森林保全基金の状況

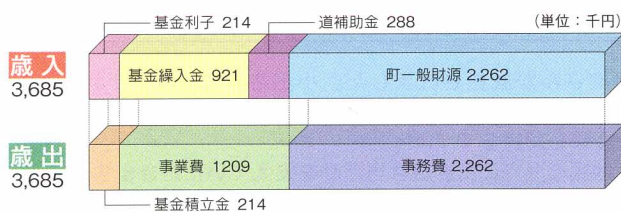
(単位: 千円) (平成20年6月1日現在)

国立公園内森林保全基金					国立公園内森林保全基金				
土地保全管理資金 (保全事業のための資金)					森林再生等資金 (再生事業のための資金)				
		H18年以前	H19年	計			H18年以前	H19年	計
歳入	寄付金	522,534	0	522,534	歳入	寄付金	177,965	8,743	186,708
	利息	67,973	214	68,187		利息	510	146	656
	計	590,507	214	590,721		計	178,475	8,889	187,364
歳出	土地取得	325,113	0	325,113	歳出	事業費	123,912	11,801	135,713
	植林等事業	130,503	1,417	131,920		事務費	26,103	584	26,687
	事務費	81,543	0	81,543		計	150,015	12,385	162,400
	計	537,159	1,417	538,576			28,460	△3,496	24,964
残高		53,348	△1,203	52,145	残高				

## 平成20年度予算

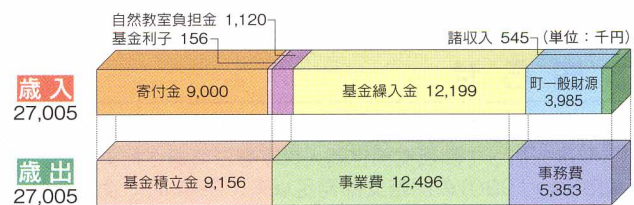
### ■保全管理事業

事業費として、植樹後10年以内の地域や記念植樹地での下刈りに、約121万円を支出予定です。事務費の約226万円は主に「しれとこの森通信」の印刷・発行費用に支出します。



### ■森林再生事業

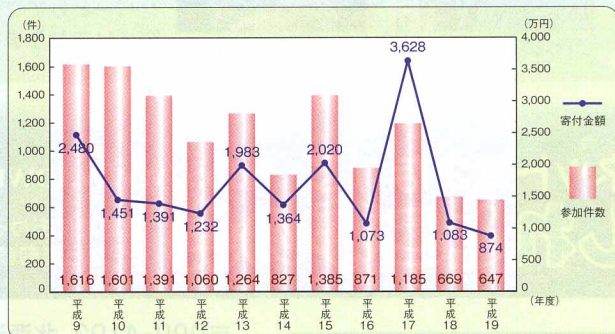
事業費は、森林再生の現地作業や森の交流事業の企画運営などに約1,215万円を支出予定です。事務費は、事務員賃金(158万円)やパンフレット等の印刷費用(187万円)など約535万円です。



### 都道府県別参加状況 (平成9年度～平成19年度末まで)

都道府県	件数	都道府県	件数	都道府県	件数	都道府県	件数
北海道	1,912	群馬県	145	長野県	110	和歌山県	42
(斜里町)	691	埼玉県	669	岐阜県	156	鳥取県	37
青森県	473	千葉県	718	静岡県	230	島根県	17
岩手県	57	東京都	2,277	愛知県	688	岡山県	83
宮城県	135	神奈川県	1,349	三重県	93	広島県	143
秋田県	36	新潟県	100	滋賀県	98	山口県	54
山形県	47	富山県	56	京都府	303	徳島県	37
福島県	48	石川県	46	大阪府	828	香川県	50
茨城県	217	福井県	47	兵庫県	467	愛媛県	29
栃木県	107	山梨県	27	奈良県	104	高知県	34
						合計	12,516

### 年度別参加件数及び寄付金額





# 知床で夢を 育てませんか!

数百年後の豊かな知床の森と生物相の復元に  
向けた取り組みは、皆様からの寄付金によって  
支えられています。次の5年間も、引き続き暖  
かいご支援をよろしくお願いします。

## ●運動に参加するには?

申込書を郵送またはファックスにてお送りください。ホーム  
ページからの申し込みもできます。

寄付金は **1口5,000円**で、何口でもけっこうです。郵便振替  
か現金書留で斜里町役場までお送り下さい。

### ●郵便振替の場合

口座番号: **02740-8-10555**

加入者名: 斜里町役場

### ●現金書留の場合

申込書も同封の上、斜里町役場自然保護係へ郵送願います。

## ●運動に参加すると!

- 将来の知床の森をイメージした募金証書を発行いたします。
- ご寄付いただいた年の活動状況を、翌年に「しれとこの森通  
信」でお知らせいたします。
- 運動地の森を通じて交流し、森づくりにたずさわる機会（し  
れとこの森交流事業）を提供します。
- 5年周期の森づくり計画が一巡することに報告書をお届けし  
ます。次回は平成25年(2013)にお送りします。

## ●運動への寄付金は所得税および住民税の控除の 対象となります

- 所得税は課税対象額から寄付控除を受けることができます。
- 地方公共団体への寄付金に係る控除が拡大され、住民税は課  
税額から寄付控除を受けることができるようになりました。
- 対象となるのは5,000円を超えるご寄付です。

## ●募金証書●

- 証書の絵は、当代随一のワイルドライフアート作家 田中豊美さんの手によるものです。
- メッセージを書き込むこともできます。例えば「祝 お誕生」など。お知り合いへのプレ  
ゼントとして、ご協力いただくこともできます。
- 地元、斜里の木工サークルの方々手作りの証書専用額縁も用意しております。センノキ  
の美しい木目が好評です。詳しくは参加申込書をご覧ください。

## 募金証書



100平方メートル運動の森・トラスト

The 100 Square Meter Forest Movement Trust

口数 寄付金額 金 円

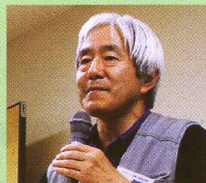
北海道斜里郡斜里町本町12番地 斜里町役場自然保護係 村田 均

## お知らせ

100平方メートル運動関西支部世話人代表の笠岡英次さん  
が昨年度をもって関西支部世話人代表をご勇退されました。  
昭和55年(1980)の関西支部発足以来、28年間に渡りこの  
運動の推進にご尽力をいただきました。誌面を借りて心より  
感謝を申し上げます。



ご勇退される笠岡さん。



新代表の小田さん。

また、後任の代  
表には、古くから  
関西支部の中心メ  
ンバーとして活躍  
されております

小田忠文さんが就任されました。小田さんは、平成14年  
(2002)には北方四島の択捉島の学術調査団に医師として同  
行した経験もお持ちです。

関西地区を拠点に引き続き当運動を支えていただきます。  
どうぞよろしくお願いします。

## 森通信の発送が不要な方はお知らせ下さい

近年、通信物の発送を希望されない方から、発送停止に  
についてのご連絡をいただくことが増えてまいりました。今  
後の通信物等の送付を希望されない方については、お手数  
ですが、斜里町役場までご連絡ください。

なお、森通信のバックナンバーは下記ホームページでも  
ご覧いただけます。

ネットをつながる <http://www.town.shari.hokkaido.jp/100m2/>  
**しれとこの夢の森** 運動地におけるニュースや自然情報などを更新しています。  
HPから運動参加申し込みもできます。



お申込み・お問い合わせ先

〒099-4192 北海道斜里郡斜里町本町12番地 斜里町役場自然保護係  
TEL 0152-23-3131(内線125) FAX 0152-22-2040